

勝ち負けの多くは、僅差である。では、その勝敗を左右する決定的な要因は何か。それはじつのところ、よくわからない(よくわからない)その何かを、人は運と呼んでいるのかもしれない。かれこれ20年以上コピーライターをやっている私だが、競合プレゼンでの勝ち負けが、どちらにしても「ぶっちぎり」であったためしなど、ほとんどない。圧勝もなければ、完敗もない。スポーツ以外の勝負の世界とは、おおむねそういうものではないだろうか。それが昨年、広告の仕事ではないけれど、10対0で負けたなあ、とつくづく思い知らされる出来事があった。

私は「FII」というフリーペーパーで毎回メインテーマとなるコピーを制作している。その時、私が掲げたテーマは「言葉がきれいな人になる」。いまどきのSNSのラフすぎる言葉遣いや勝手な造語に日頃から違和感を感じている私は、こはひとつ意義申し立てをやってやろうと考えたのだ。そして毎回、テーマに沿って取材対象者を3人ピックアップするのだが、「今回は言葉の話なんだから、岡本さん出てみたら?」と編集スタッフに言われ、受けてしまった(ちよつとは抵抗したものの、内心、まあまんざらでもなかったのだ)。表紙にも登場いただくメインには、ある女優さん。もうひとりが日本語教育の第一人者であり、よくメディアにも登場している金田一秀穂さん。そして最後が私、という並び。実際私が取材の中で語ったことは、SNS全盛のこの21世紀、言葉を書くという行為も送るという行為も、ことごとく簡単になりすぎている。言葉は時に暴力にもなりかねない危険物なのだから、もつとみんな慎重に、臆病に、恐る恐る送ったほうがいいということ。そしてどうせ送るんだったら、相手のことをきちんと考えて「言葉を贈る」という意識が何より大切ではないかということ。他にもコピーライターの流儀やら異常に推敲することのススメなど、自分が信じていることやふだん実践していることを比較的ストレートに話したのだ。

巻頭コラム

柔らかな、凄み。

岡本 欣也 コピーライター・クリエイティブディレクター

後日、自分の原稿とともに、金田一さんの原稿が送られてきた。その中で金田一さんが語られていたのは、「言葉は間違ってもいい」だった。敬語の使い方が正しいとか間違っているとかがよく話題になるけれど、そこに気持ちが進められてさえないなら、それは美しい日本語なのです、と穏やかに答えられていた。そして金田一さんが考える、いちばん美しい言葉とは何ですか。インタビュアーのその問いに対しては、「生まれたばかりの赤ちゃんに一生懸命お母さんが話しかけますよね。日本語なんてまだわからないのに。だから赤ちゃんはたった1、2年で言葉が話せるようになるのでしょ。まさに心からの言葉だから。なんだっていいんですよ。心からの言葉、正直に言う言葉は美しい」。ハッとした。体の中でドスンと腑に落ちる音がした。本当の本質に出会った時の、深いところからの幸福感。それを噛みしめる間もなく私はだんだん恥ずかしくなり、ああ負けたと思った。

私は書き言葉について、金田一さんは話し言葉について語ったのだから一概には比べられない、そもそも勝負をしているわけではないのだから関係ないんですけどね。そんな言い訳が頭に浮かんできた時点でこれは完全に負けだと悟った。言葉に対する思いの深さ。感性の柔らかさ。もつといえ、魂のレイヤーが違う。ただ私の場合、この敗北にひどく落ち込んでいるわけでもない。むしろ負けてよかった。金田一さんのこの考えに触れてから、言葉を考える時間のすべてが、少しだけラクになったから。

岡本欣也(おかもと・きんや)

コピーライター・クリエイティブディレクター

1969年生まれ。1994年岩崎俊一事務所入社。2010年オカキ設立。代表作は、MINTIA、MINTIA LOVES LIFE、WOWOW「目の前を、おもしろく」、住友生命1UP「リスクについて考えないのがいちばんのリスクだ」と思う。『京王グループ』(東京は、美しい。)、日本たばこ産業「あなたが気づけばマナーは変わる」など。著書に『売言葉』と『買言葉』、『大人たばこ養成講座1・2・3』。テレビ番組やフリーペーパーのディレクションも手掛ける。